

ふるさと米子探検隊

たんけんたい
第28号 戦後80年特別号
平和学習 米子 ~戦争のはじまりと復興まで~



米子市立図書館 編刊/2026.3 TEL0859-22-2612 FAX0859-22-2637 <https://www.yonago-toshokan.jp>

日本で戦争が終結して、令和7（2025）年で80年が経ちました。外国では今も戦争や紛争が続いている地域があります。戦争の恐ろしさを知ることは、新たな戦争を防ぐ平和への第一歩です。私たちは平和な未来を守るために、戦争について学び続けなければなりません。

しかし、今私たちの身近で、戦争体験者から直接話を聞く機会はどんどん失われています。「ふるさと米子探検隊第18号」では、アメリカ軍が残したアクション・レポート（戦闘報告書）から、米子の地方空襲の実態を探りました。また、令和7（2025）年8月には米子市立図書館で「戦後80年米子～戦争の追憶展」という展示を開催しました。

今回の探検隊は、この令和7年度の戦争展示をまとめたものです。当時の地方新聞や写真を中心に、米子地方の戦争の時代をふりかえります。戦争はなぜ始まったのか、戦争が私たちのふるさとにもたらした悲しみと、乗り越えてきた先人たちの思いを、今も残る資料から一緒に考えていきましょう。



令和7年度「戦争の追憶展」
ポスター

目次

外国との戦争のはじまり 日清戦争 日露戦争	p. 2
十五年戦争のはじまり 満州事変 日中戦争	p. 3
アジア・太平洋戦争	p. 5
米子でも空襲があった	p. 5
アクション・レポート 永安丸と第二伊勢丸	p. 6
大山口列車空襲	p. 7
戦時中の子ども	p. 7
学童集団疎開 満蒙開拓青少年義勇軍 建物疎開	p. 8
チ号演習	p. 9
戦後の米子 GHQ の日本統治	p. 10
地方軍政部 米子博覧会	p. 11
おわりに 参考資料	p. 12

外国との戦争のはじまり

近代日本の戦争のはじまりは、明治時代までさかのぼります。

開国した明治時代の日本は「富国強兵」をスローガンに、国を豊かにして、まわりの国々を侵略して強い国にのしあがろうとしていました。

明治6（1873）年に国民に徴兵（強制的に兵士に召集されること）令が発令されました。これまで戦うのは武士たちでしたが、この徴兵令によって、一般の百姓や町人から満20歳以上の男子が徴兵されました。明治21（1888）年には、師団（陸軍の軍事組織。独立した作戦行動をとれる最大の部隊）ができ、その役割は国内防衛から、外国と戦うための部隊へと変わっていきました。

また、このころは多くの馬が軍馬として育てられました。明治23（1890）年から大正12（1923）年まで、大山、蒜山に陸軍軍馬補充部大山支部が設置されました。



蒜山三平山には、軍馬が逃げないように56kmもの土壘が建設され、今もその跡がのこっています



日清戦争

明治27（1894）年、日本と清（中国）は朝鮮半島に勢力をのぼそうとして対立し、戦争を始めました。日清戦争とよばれる戦争です。この頃、鳥取県は第四師団に所属していました。第四師団で亡くなった人の数は1480名といわれています。そのほとんどが、コレラ、または赤痢による病死でした。日清戦争では多くの日本人兵士が亡くなりましたが、それを上回る多くの清の人々が犠牲になりました。

日清戦争で勝利した日本は、軍の力をさらに強くするため各地に連隊をつくり、各地方も積極的に連隊の誘致運動（自分の地域に誘うこと）を行いました。

鳥取県も誘致運動が実り、明治29（1896）年、鳥取市に歩兵第四十連隊が設置され、鳥取県は第十師団第四十連隊区に入りました。四十連隊は日清戦争で日本の植民地となった台湾の警備に当たりましたが、病気や酷暑で多くの人が亡くなりました。

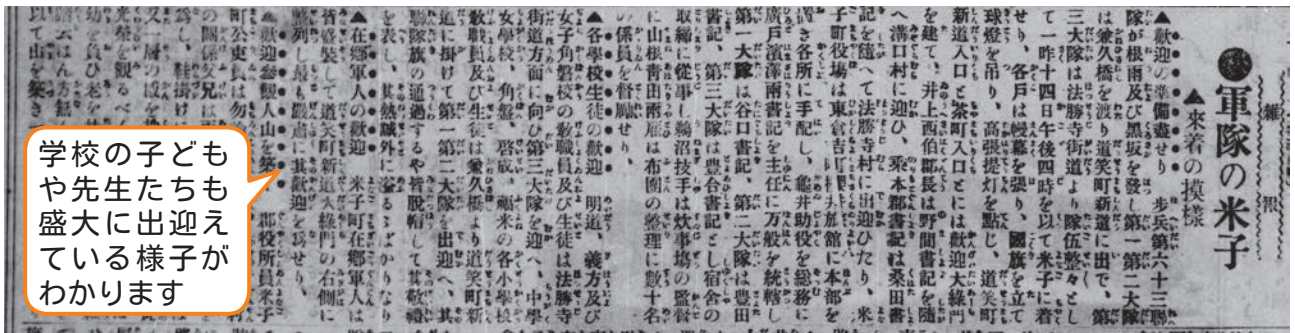


日露戦争

明治37（1904）年、満州（中国東北部）と朝鮮半島をめぐり、南下政策をとるロシアと日本は対立を深め、日露戦争が起きました。この戦争にも四十連隊が従軍しましたが、日本軍だけでも約8万人以上の戦病死者がでました。

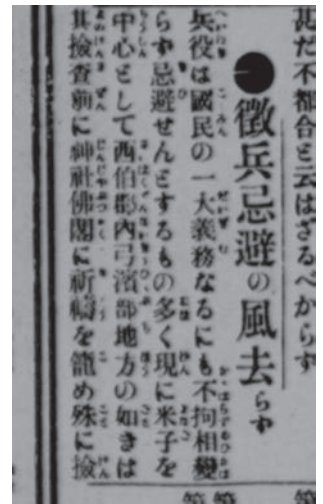
米子市立図書館には、大山寺法霊院でつくられた『日露戦役戦死者霊名簿』という日露戦争で亡くなった兵士の名簿があります。これを見ると、米子や日吉津、日野郡出身の兵士が病死や戦死で多く亡くなっていることがわかります。

日露戦争に勝った日本の軍隊は、さらに拡大します。明治40（1907）年、松江の積極的な誘致によって、松江市に歩兵第六十三連隊が設置されました。当時の新聞には、翌年、米子を通って松江に向かう第六十三連隊を歓迎するため、米子市内はたくさん見物人で大混雑したことが伝えられています。



明治41年11月15日付「山陰日日新聞」歩兵第六十三連隊が米子にやってきてにぎわう様子を伝える記事

しかし、こうして軍を支援する一方、このころの人々は自分や家族が徴兵されることを嫌っていました。右の画像は、大正2(1913)年に掲載された「山陰日日新聞」の記事です。米子地域でも、徴兵されないようにと神仏にお祈りする人が多くいたことが書かれています。



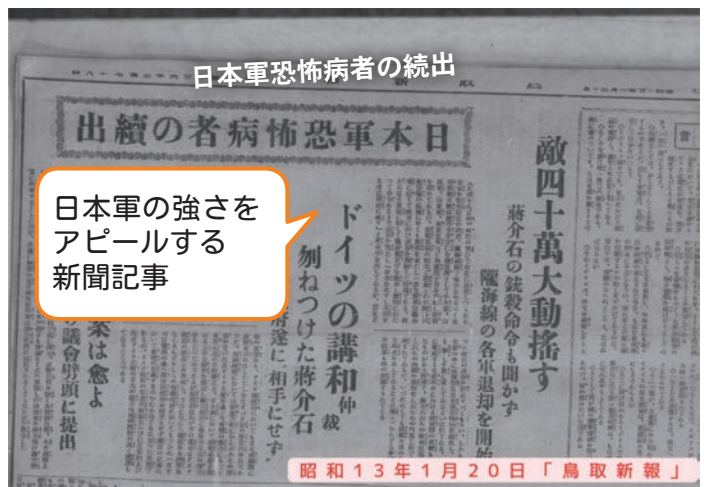
大正2年5月31日付「山陰日日新聞」

十五年戦争のはじまり

満州事変 昭和6(1931)年9月18日、満洲で南満州鉄道の爆破事件が起こりました。日本の関東軍はこれを中国のしわざであるとして、いっせいに中国に対する軍事行動をはじめます。これをきっかけに、わずか4カ月で、日本軍は満州のおもな都市や鉄道沿線を占領しました。「満州事変」とよばれる出来事です。日本は満州を中国から独立させ、支配しました。四十連隊、六十三連隊は、満州に出兵しました。新聞は満州事変を大きく報じて、戦争を支持するよう国民の意識を煽りました。満州事変を記念した国防大会も各地で開かれ、米子の人々も熱狂しました。ここから昭和20(1945)年までの侵略戦争は、まとめて「十五年戦争」と呼ばれます。

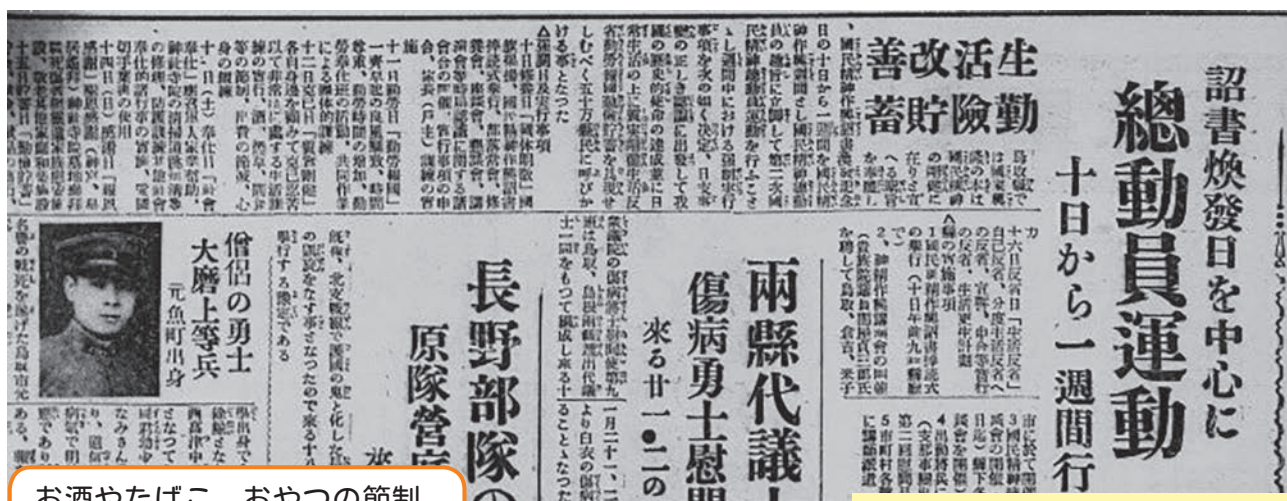
十五年戦争がはじまったばかりの日本は、戦地は遠い外国であり、一般市民はまだ戦争の恐ろしさを実感していませんでした。

日中戦争 昭和12(1937)年、ついに中国との全面戦争が始まりました。日中戦争のはじまりです。新聞などの報道は規制され、国民は戦争の実態や、戦争に対する批判的な言論も知ることができなくなりました。報道は、日本軍がいかに強いかを伝えるばかりでした。戦病死者は市を挙げて弔われました。四十連隊と六十三連隊は、昭和12(1937)年から中国戦線に加わりました。



日中戦争によって、人々の暮らしも大きく変わりました。昭和12(1937)年の防空法によって、夜は家の電気を暗くする灯火管制や、各地で防火訓練などが行われました。毒ガス対策のための防毒マスクの着用訓練もありました。やがて大量の兵士の出征と戦死者の増加によって、

物資や労働力が足りなくなりました。国は、国民を戦争に全面的に協力させるために、「国民精神総動員運動」を実施します。「欲しがりません勝つまでは」などのスローガンを掲げ、節約や勤労奉仕、国が指定する仕事への強制的な転職など、国民は私生活まで統制されていきました。



お酒やたばこ、おやつの節制、勤労奉仕や訓練の時間を長くすることが決まりました。

日中戦争が始まったころの新聞広告。日本軍の連戦連勝を祝い、呉服店が大売出しの広告を掲載しました



防毒マスクの装着訓練の様子



なぜ戦争で物資が足りなくなったの？

戦争になると、兵器や弾丸の材料（鉄・金属）、兵器や武器を運ぶ船や車、兵士の食料など、様々なものが必要になります。戦場は中国やアジアの広い地域なので、運ぶための燃料も必要です。日本はもともと金属や燃料などの重要資源が乏しく、外国からの輸入に頼っていました。しかし、戦争が始まり輸入が難しくなり、日本は少ない資源をできる限り軍事物資に振り分けるため、国内ではいろいろな物資が不足するようになりました。市民は節約を強いられ、限られた資源をみんなに分け与えるために「配給制」ができました。国民ひとりに一定の割合が決められ、それ以上は買えなくなったのです。



アジア・太平洋戦争

昭和16(1941)年、日本はアメリカやイギリスとも対立し、ハワイのアメリカ軍基地を攻撃、ついに連合軍との太平洋戦争に突入しました。日本中が「戦争に勝つぞ!」と興奮していました。米子では、太平洋戦争が勃発した翌日に勝田神社の境内で戦勝祈願が行われました。



勝田神社戦勝祈願(昭和16年)

昭和16(1941)年には敵機襲来に対する防空監視が強化され、米子市内では昭和20(1945)年3月に米子東高の裏にある勝田山に防空監視哨(敵の飛行機を見つけるための監視施設)が建設されました。防空監視哨には、男女問わず視力が良い人が選ばれ、敵機の監視を行いました。

戦争が激しくなると経済情勢はますます悪化し、人々の暮らしは苦しくなっていました。同じ年の昭和16(1941)年、米子市で物資の配給が始まりました。また、戦時中は軍需物資不足のため、国民から強制的に金属の供出(国などの要請で物資を差し出すこと)が求められました。左



昭和20年米子防空監視哨
竣工記念(勝田山)

米子市立山陰歴史館所蔵



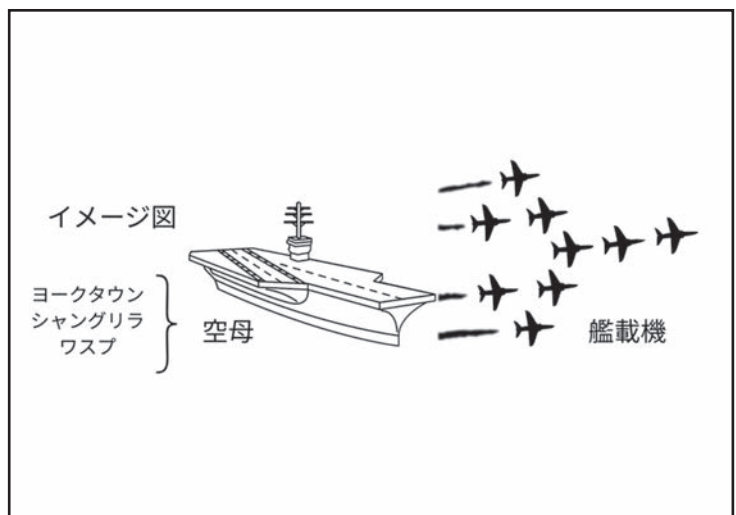
米子市日野町金属供出(昭和19~20年
岩佐武彦氏提供)

の写真は、米子の日野町で昭和19(1944)~20(1945)年ごろに行われた金属供出の写真です。積み重なっているのは、町内住民が長年大切に使用してきた思い出のある火鉢などです。一つ一つにどの家から出されたものか名札が貼ってあります。これは、供出していない家がないか、お互いを見張るための意味もありました。



米子でも空襲があった

B29 とよばれるアメリカ陸軍の爆撃機による空襲は日本でもよく知られています。中海や美保湾にも、B29による機雷投下がありました。一方、日本をすみずみまで爆撃したのは、アメリカ海軍の艦載機(空母に搭載された戦闘機のこと)でした。昭和20(1945)年、アメリカ海軍の太平洋第38機動部隊は、日本本土に残された軍事を徹底的に破壊する任務を与えられました。



※米子地方の空襲については、「ふるさと米子探検隊18号」でくわしく紹介しています

このうち、第38機動部隊第4任務艦隊の空母ヨークタウン、空母シャングリラ、空母ワズプから飛び立った艦載機が、米子地方を襲いました。主な攻撃目標は、美保基地や三柳陸軍飛行場、米子駅や機関車車庫、日曹米子工場などです。島根県の大社(新川)基地、湯町水上基地も攻撃目標でした。昭和20(1945)年7月24日、25日、28日、米子をはじめ鳥取県西部は空襲によって各地で多くの犠牲者が出ました。



アクション・レポート

米子地方の空襲の実態は、被災した人々の日本側の記録のほか、アメリカ軍のアクション・レポート(戦闘報告書)からも知ることができます。アメリカ軍が作成した膨大なアクション・レポートは、現在インターネットで公開されています。この報告書を見ると、アメリカ軍が日本の地図や飛行場などをくわしく調べ、いかに日本の情報に精通していたのかがよくわかります。

下の表は、アクション・レポートを基に数えたアメリカの空母から飛び立ち米子地方にやってきた艦載機の数です。平成28(2016)年に発行した「ふるさと米子探検隊18号」にも同じ表を掲載しましたが、あれから調査が進み、空襲でやってきた艦載機の数はい前確認したときよりさらに多かったことがわかりました。今後の研究によって、この数はさらに多くなるかもしれません。

空襲艦載機数一覧表 ※令和7(2025)年11月確認のもの

1945年7月	24日	25日	28日	(3日間合計)
空母ヨークタウン(88隊)	9	28	34	71
空母シャングリラ(85隊)	12	37	38(+12)	87(+12)
空母ワズプ(86隊)			36	36
合計	21	65	108(+12)	194(+12)

※28日の(+12)機は、大阪方面から新川基地へ直行した機数です(ミッション名:Blanket Airfield Osaka area)

参照:米国公文書館所蔵アクション・レポート/田中真氏/提供, 大野秀氏/解読

永安丸と第二伊勢丸

7月

25日、美保と米子の飛行場を攻撃したアメリカ軍の艦載機は、大山町の名和沖で永安丸と第二伊勢丸という日本の貨物船を上空から発見し、攻撃しました。永安丸では10人、第二伊勢丸では9人が亡くなったといわれていますが、永安丸の記録はあいまいで、死者数はもっと上回ると考えられます。右上のアクション・レポートの画像は、第二伊勢丸がまさに攻撃されている様子です。アメリカ軍が上空から撮影したものです。2つの船は現在も名和沖に沈んでいます。近年は水中ドローンでの2つの船と思われる沈没船が発見され、調査が進められています。



第二伊勢丸爆撃画像(出典:米国公文書館第三八任務部隊アクション・レポート)田中まこと氏/提供

だいせんぐちれっしゃくうしゅう
大山口列車空襲

米子地方の3日間の空襲の中で、最も被害

が大きかったのは7月28日の空襲でした。艦載機コルセア3機による大山口列車空襲では、列車に乗っていた45名以上が死亡、30名が負傷しました。同じころに米子駅前の民家2カ所にもロケット弾が落ち、7名が死亡。島根県の基地も空襲に遭い、多数の犠牲者がでました。

列車の中は血や肉のかたまりだらけだったと当時をふりかえられています

淀江町日吉神社前で救助活動をされた新田典子さんが、昭和56年以降に大山口列車空襲を思い出して描いた絵。



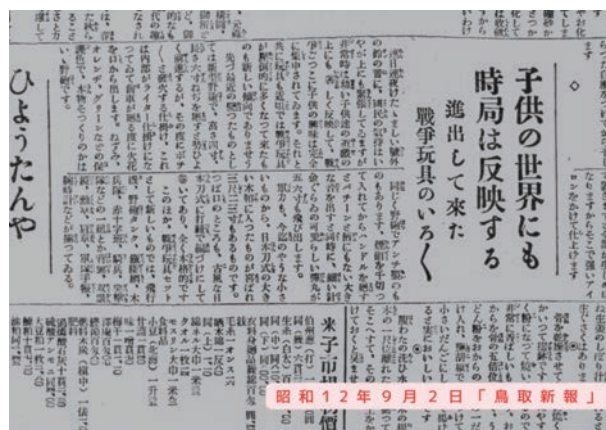
米子市立図書館所蔵

※大山口列車空襲については、「ふるさと米子探検隊18号」でくわしく紹介しています

戦時中の子ども

子どもたちが通う学校が戦争の影響を受けるようになったのは、日露戦争が始まったところからと考えられます。「山陰日日新聞」には、角盤高等学校や米子の尋常小学校の生徒たちが、自分のお小遣いを軍のために贈ったことが伝えられています。戦争に関する学校行事も少しずつ多くなってきたのもこのころです。中学校や青年学校（中学校に進学しない子どもや青年が通う学校）では、軍事教練といわれる軍事訓練が行われました。

昭和13（1938）年から、「学徒勤労動員」という制度ができました。これは、中等学校以上の学生や生徒が労働力を補うため、工場や農村で働くことです。戦争が激しくなると授業はますます減り、勉強する時間は勤労作業に振り替えられました。米子では、三柳飛行場で勤労奉仕中の啓成小学校の子どもが一名亡くなるという悲しい事故が起きました。



子どものおもちゃも戦争おもちゃがはやりました。
(昭和12(1937)年9月2日付「鳥取新報」)



昭和19年 陰田射撃場での射撃訓練



昭和19年 防災頭巾で登校する子ども

がくどうしゅうだん そ かい
学童集団疎開

空襲が激しくなってきた昭和19（1944）年ごろになると、都市に住んでいる子どもたちの疎開が進められました。この戦時中の疎開とは、子どもの命を守るための政策というより、空襲を受けた際に足手まといになる子どもたちを都市から離すことが主な目的でした。鳥取県内には、兵庫県の子どもたちが疎開することになりました。米子には淀江（旧西伯郡淀江町）に172名の子どもたちが疎開しました。しかし、戦争末期の日本は都市部だけではなく、地方にも空襲が広がり、疎開政策は意味のないものになってしまいました。鳥取県に疎開した子どもたちは、終戦後も政府の指示ですぐに故郷に帰ることができず、不安な日々を過ごしました。ようやく帰ることができたのは、戦争が終わって2カ月過ぎたころでした。



まんもうかいたくせいしょうねん ぎ ゆうぐん
満蒙開拓青少年義勇軍

15才から18才の男子を満州国の開拓へ送り出した制度です。鳥取県では昭和13年から終戦までの間、第一次～第八次の募集を行い、多くの若者が参加しました。中には14才の子どももいました。鳥取県の義勇軍の送り出しの割合は日本一で、学校教育が大きな影響を与えたといわれています。しかし、義勇軍に行った多くの若者を待っていたのは、訓練所での苦労、病気、敗戦での逃避行など、死と隣合わせの体験でした。

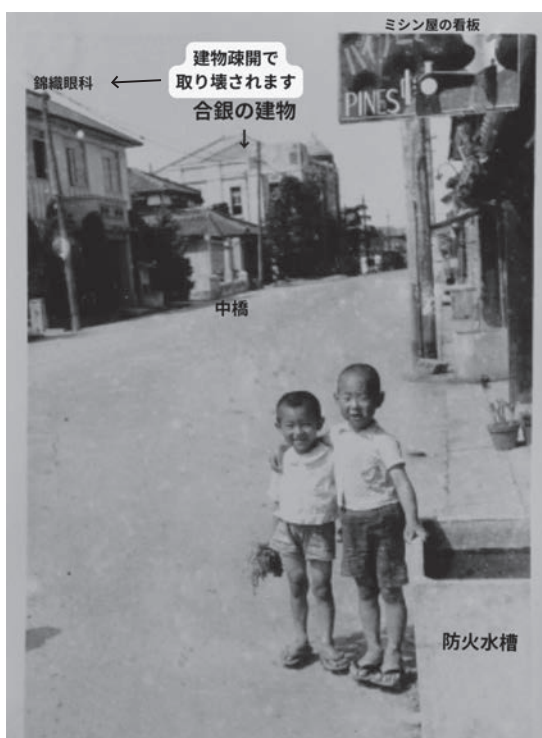


啓成小校庭での満蒙開拓義勇軍の整列

たてもの そ かい
建物疎開

戦時中の疎開は、空襲を避けるために子どもたちが田舎へ疎開する「学童疎開」のほか、空襲による建物の火災を防ぐため、あらかじめ建物を壊して防火する「建物疎開」がありました。米子市では7月14日から重要施設などの取り壊しが始まりました。終戦直前の8月14日まで取り壊しは続きました。右の写真は、昭和20年ごろ、旧米子市役所（今の米子市立山陰歴史館）前で撮影されたものです。岩佐武彦さん（写真右の少年）のおうちは、当時市役所前の通り（今の国道9号線）で写真屋さんを営んでいました。岩佐さんの家も、建物疎開で取り壊しが決まっていたいました。荷物を片づけ、いよいよ明日が取り壊し……という14日、突然取り壊しが中止、そして終戦となったそうです。米子市だけでも約700棟もの建物が取り壊されました。

（『新修米子市史 第十巻 資料編近代』P.195 参照）



岩佐写真店前で撮影。
昭和20年/岩佐武彦氏提供

ごうえんしゅう
子号演習

ほん ども けっせん
本土決戦（日本国内で戦うこと）に備えた陸海軍の秘匿（秘密にすること）

作戦の名称で、昭和20（1945）年5月から鳥取県内全域で一斉に始まりました。

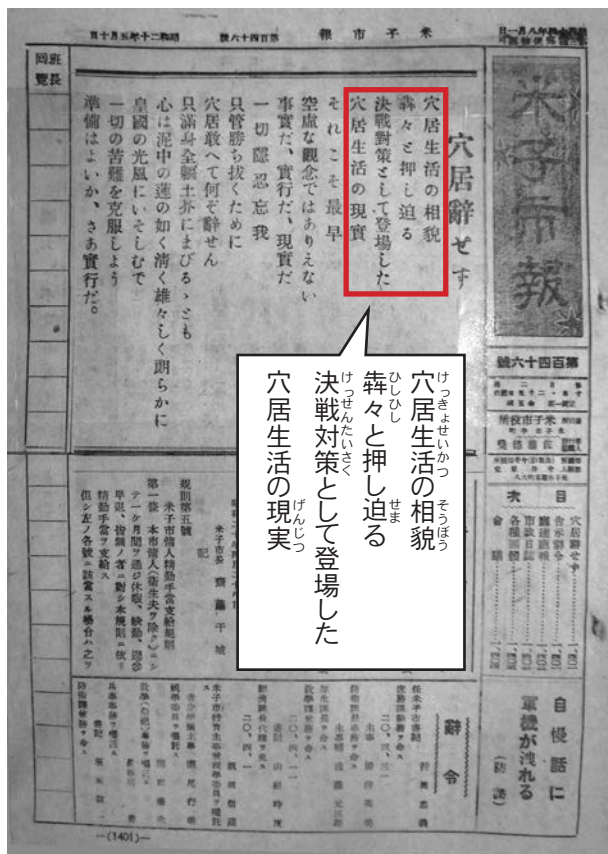
敵から身を隠したり、弾薬や物資を貯蔵したりする壕（土を掘ってつくる穴や溝）を山に掘るのです。県内あわせて5～60万人が集められました。この中には、女性や児童生徒も大勢いました。鳥取県西部では米子の成実地区、淀江の宇田川地区、岸本の越敷山などが作業場所となりました。土を掘ったり運んだり、作業はとてもつらく、お腹がすいて力も入りません。



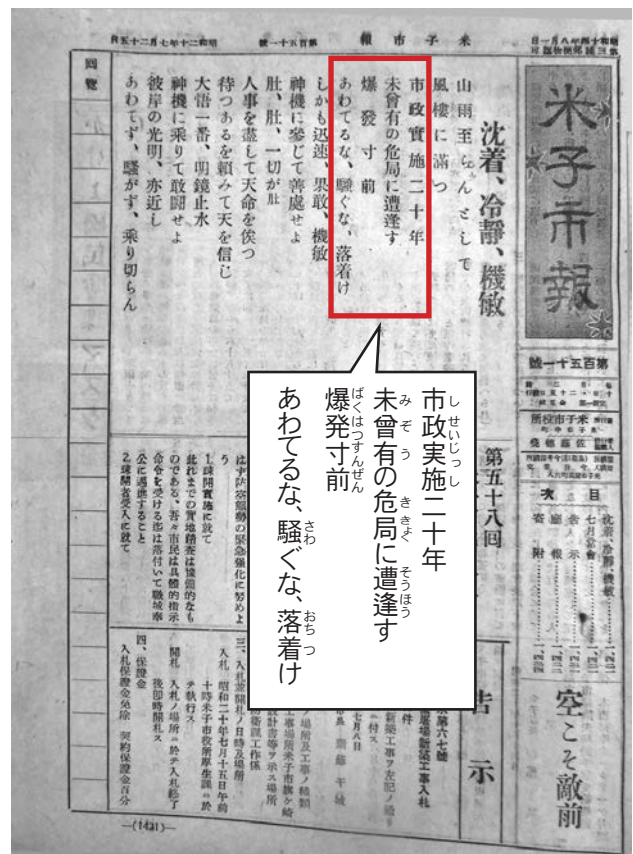
早く子号演習に出かけたお父さんが、夜になると全身土だらけで真っ黒になって帰ってきたという家族の証言もあります。この作戦は実行されることがないまま戦争は終わりましたが、こうして戦争末期には、一般市民の生活の場も戦争の前線になろうとしていたのです。

※「子号」とは、「地下壕陣地構築秘密作戦」の略称。（『星の光』吾郷重善著 日本図書刊行会1993.12 p.126参照）

昭和20（1945）年に発行された米子の広報誌



穴居生活の相貌
犇々と押し迫る
決戦対策として登場した
穴居生活の現実



市政実施二十年
未曾有の危局に遭逢す
爆発寸前
あわてるな、騒がな、落着け

昭和20年5月10日「米子市報」

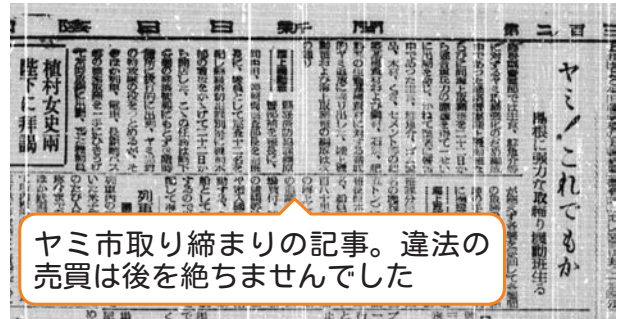
「穴居生活」とは、防空壕のことか、あるいは子号演習のことでしょうか。このころは艦載機の襲来により、防空壕掘りもさかに行われました。戦時中に発行された「米子市報」は毎号、戦争に対する市民の気持ちを高揚させる文章を掲載しました。

昭和20年7月25日「米子市報」

「市政実施二十年 未曾有の危局に遭逢す」とは、米子市政がはじまってから、いまだかつてない危機に出くわしたということです。7月24日から始まった空襲で米子が混乱している様子が伺えます。この日の発行を境に、米子市報は発行が途絶えます。戦時中に発行された最後の市報です

戦後の米子

8月6日に広島、9日には長崎に原爆が落とされました。8月14日に日本は全面降伏、8月15日、日本はポツダム宣言の受諾を決定し、昭和天皇がラジオ放送で戦争が終わったことを告げました。国民はこれから日本がどうなるのかとても不安でしたが、目の前には食料や生活物資の不足、物価の高騰など、問題が山積みでした。灯火管制で暗かった家々は、15日の夜にはどの家も電灯がつかいましたが、米子の人々は不安でいっぱいでした。これから日本はどうなるのか、米軍に強制労働をさせられるのではないかなど、たくさんのデマも飛び交いました。



昭和22年4月23日付「山陰日日新聞」

軍需工場に徴用されていた人々や、軍人、海外からの引揚者が米子に帰ってきて、人口は一気に増えましたが、仕事も食べ物もありません。昭和20(1945)年から21(1946)年にかけては、大変な食糧難となりました。食糧だけでなく、生活物資も不足していました。米子では、法勝寺町と紺屋町の近くで、ヤミ市とよばれる青空市場がひらかれ、警察の取り締まりをすりぬけながら、生活必需品が違法で売買されました。引揚者と戦災にあった米子市の戦争犠牲者は、約7000人といわれています(『新修米子市史近代編』p.42参照)。



GHQの日本統治

戦後の日本

は、GHQと呼ばれる連合軍司令部が統治しました。GHQは日本政府に指令をだし、日本の軍隊の解体や、民主化に向けた政策を行いました。日本各地には占領軍(他国の領土を武力で支配する軍隊)を進駐(他国の領土にとどまること)させ、鳥取県には10月に進駐、11月には美保基地が占領軍に取り上げられました。12月には米軍の部隊がやってきて、米子市は鳳翔閣(湊山公園の中にあつた大正天皇の行在所)という建物を将校の宿舎として提供しました。

米子市庁舎(今の山陰歴史館)の向かいにあつた岩佐写真館。戦後、店頭には進駐軍のお客のために英字の看板が掲げられていました



岩佐武彦氏提供

GHQ政策によって、米子の町も変わっていきました。美保基地が近い大篠津には、進駐軍向けの娯楽のお店が立ち並びました。基地では日本人労働者も多く雇用され、食堂のコック、通訳、整備士、ウェイトレスなど、多くの市民が進駐軍の基地で働きました。米子の町は進駐軍のための英字の看板も増えていきました。こうした進駐軍の占領期は、昭和20(1945)年8月からサンフランシスコ平和条約が結ばれる昭和27(1952)年4月まで続きました。

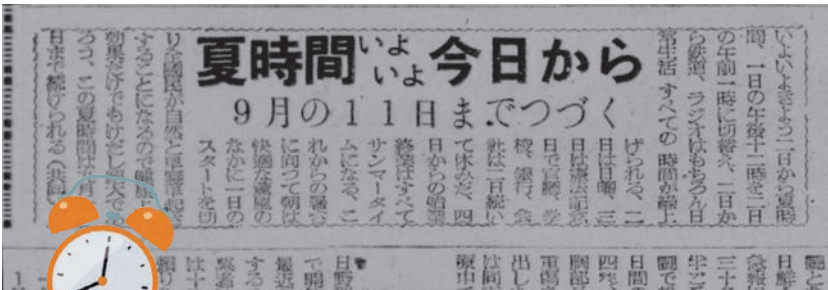


岩佐武彦氏提供

昭和22年9月に撮影された米子市庁舎（今の山陰歴史館）前の通り。進駐軍の家族が歩く様子。後ろに見える山は飯山。



昭和30年ごろの紺屋町通り。道路の標識には進駐軍がいたころの名残か、英字の表記が残っています



昭和23年5月2日付「山陰日日新聞」

占領軍が進駐中は「サマータイム」(夏時間)が日本でも導入されました。米子の人は最初は慣れずにとまどったそうです

ちほうぐんせいぶ
地方軍政部

美保基地など旧日本軍施設の^{せつりゅう}接收（国家などが所有物を取り上げること）をしたのは実行・実戦部隊である進駐軍ですが、この進駐軍とは別に、都道府県の各地方には行政の監視や点検を行う「地方軍政部」という組織が配置されました。この軍政部の活動報告書が半月（1947年からはひと月）ごとにGHQ司令官及び関係部局へ送られました。近年、鳥取軍政部の報告書の解読と研究が「^{せんりょうき}占領期の鳥取を学ぶ会」によって進められ、戦後占領期の鳥取県の様子が明らかになってきています。

よなごはくらんかい よなごはく
米子博覧会(米子博)

昭和24（1949）年、戦後の復興は^{ふっこう}少しずつ進みましたが、まだまだ市民の暮らしは楽なものではありませんでした。当時の西尾鳥取県知事は、^{ひへい}疲弊した鳥取県の産業と観光を盛り上げようと、米子で大博覧会^{かいさい}を開催することを決めました。米子博は大変盛り上がり、この米子博をきっかけに米子の商店街も活気がもどり、戦時中に^{ちゅうだん}中断していた大売出しやお祭りも復活しました。



会場には大きな地球儀が登場！



大人気のすべり台。
長さは50m！

おわりに

明治から昭和までの戦争をふりかえりました。特に満州事変から15年にわたるアジア・太平洋戦争は、日本をはじめ米子の地方にも大きな打撃を与え、戦後も進駐軍の占領期は長く続き、市民の生活は一変しました。



この戦争の歴史は、日本が受けた悲惨な被害の歴史だけではありません。日本の中国やアジア諸国への侵略戦争の歴史でもあります。当時の新聞や広報は日本の諸外国への侵略行為を華々しい記事にして、多くの人々が熱狂しました。戦争を知るということは、あらゆる角度から歴史を見つめ、人間らしく生きることを学ぶことです。

今回の探検隊で紹介できなかったことはまだまだたくさんあります。これからの研究で新たに発見される歴史もあるでしょう。次の世代に平和のバトンをつなげるため、戦争が国、地方、人々にもたらしたことを私たちは学び続けなければなりません。

米子市立図書館はこれからも貴重な戦争資料を収集し、発信していきます。戦争についてもっと学びたい、知りたいと思った方は、ぜひ米子市立図書館に来てください。

※ p. 2 p. 4 p. 5 p. 7 p. 8 p. 11掲載の写真、及び新聞記事は米子市立図書館所蔵資料です。

ふるさと米子探検隊28号の主な参考資料

さんごうしりょう

※このほかにもまだまだたくさんの戦争関連資料があります

- 『鳥取総合聯隊史』（鳥取総合聯隊史編纂委員会//編 鳥取総合聯隊史刊行委員会 1983）
- 『日露戦役戦死者霊名簿 明治37、38年戦死者名簿』（大山寺法霊院）
- 『新修米子市史 第三巻 近代通史篇』（米子市 2007）
- 『新修米子市史 第十巻 資料編近代』（米子市 2005）
- 『戦後70年 鳥取と戦争 平成27年度企画展』（鳥取県立博物館編 鳥取県立博物館 2015）
- 『戦後70年戦争の記憶～次世代に語り継ぐ～』（米子市立山陰歴史館 2015）
- 『アメリカ海軍艦載機の日本空襲』（工藤洋三/著・発行 2018）
- 『壺瓶山-「伯耆」の歴史を語る山-』（淀江中央公民館歴史教室 2003）
- 『わたしたちのまちの20世紀』（中浜地域史編纂委員会 2001）
- 『米子地方空襲 米軍資料⑥』（米子市立図書館/編刊 2015）
- 『米子市報（合冊）昭和19年～昭和20年7月25日』（米子市役所 1945）
- 『伯耆文化研究 第26号』（伯耆文化研究会 2025）「終戦・戦後の混乱・復興・進駐軍一当時の様子を占領軍鳥取軍政隊報告にみる-」/岩佐武彦
- 『米子航空機乗員養成所記念誌』（記念碑建設委員会//編 記念碑建設委員会 1976）
- 『米航養史』（米子航友会//編 米子航友会 1994）
- 『その時、ここで 十五年戦争と鳥取県』（鳥取県教職員組合ほか/編 1996）
- 『美保基地周辺の戦争遺跡群 二度と戦争の基地にしないために』（平和のための戦争展境港市実行委員会 2023）
- 『就将校区街並み・住宅地図 太平洋戦争終結前の復元図』（箆谷友江 1995）
- 『鳥取県史ブックレット第15巻 鳥取県への学童集団疎開』（鳥取県 2014）
- 『徴兵・戦争と民衆』（喜多村理子/著 吉川弘文館 1999）

図書館資料をつかって調べてみよう

- 米子の飛行場の歴史を調べてみよう（三柳飛行場・美保基地）
- 米子をはじめ鳥取県内には、戦争にまつわる場所や建物がたくさんあります。あなたの住む地域にも、戦争のつめあとがあるかもしれません。戦争遺跡を調べてみよう。